第 23 回大会報告記

中　窪　　靖

11月4日（土）、大学祭の最中の青山学院大学で、日本アイリス・マードック学会第23回年次大会が開催された。4年ぶりに対面での実施となった。当日は、学園祭の熱気を感じながらの幕開けとなった。ハラー会長の尽力により、イギリスのマードック学会の中心のメンバーであり、著名なマードック研究者であるマイルズ・リーソン先生を特別講演の講師として招聘することができた。

今回の第23回大会は、対面を基本としながら、希望に応じてオンラインでの参加も可能とした。結果、理事を中心に会場に参加する会員に加えて、Zoom での参加を希望する会員、合わせて、海外からのマードック研究者が特別講演に参加することによって、参加者は延べ20名ほどとなった。中には、学会の SNS の情報を見て参加した研究者がいた。これは、新しい会員の獲得が伸び悩んでいる中での朗報と言える。SNS があれば、これから先も、マードックに関心をもつ学究の参加が得られるであろう。今回も、研究発表と特別講演の二部構成とすることができた。研究発表は、詩作品が2本、日本人作家との比較研究、さらに、英国人作家との比較研究という多様な構成が実現した。

岡野浩史氏は、詩‘Agamemnon Class 1939’を取り上げて、彼女の凡庸ならざる詩的な才能を明らかにした。この作品はトロイ戦争のイメジャリーが巧みに織り込まれ、意に反して命を落とした学友、フランク・トンプソンへの哀悼の意となっている。フィオナ・トムキンソン氏は、三島由紀夫の最後の連作『豊饒の海』と *Nuns and Soldiers* とを比較し論じた。三島の作品の中の“溺れ死んだ犬”をキーワードにして、マードックが三島のこの連作に影響されて *Nuns and Soldiers* を書いたと指摘する。三島が、目的のためには死をも恐れないあるいは死をもって償うという登場人物を創造したことと関連付けた。ポール・ハラー氏は、禅とマードックとの関わりを切り口にして、マードックの詩作品、*Motorist and Dead Bird*（1977）を分析した。マードックは、禅を中心とする日本の思想の中の重要な側面を知ることにより、その作品に影響を受けていると論じる。北村有紀子氏は、マードックの『海よ、海』とアニタ・ブルックナーの『秋のホテル』とを比較した。二人の作家の用いる色のイメージが、それぞれの作家の創造する登場人物の内面を映し出す効果を持っていると論じる。また、批評家レベッカ・モディンの論じていない論点に着目し、それぞれの作家には黒と灰色の使い方に特徴があることを明らかにした。

特別講演のマイルズ・リーソン氏は、アイリス・マードックとジョン・ベイリーの夫婦が、実作者と批評家として相互に影響し合って、それが錬金術的に新たな効果を生んだことを指摘した。ジョンは小説の校閲者として *The Bell* の改稿を迫ろうとした。アイリスは、ジョンの申し出を受け入れなかったが、それが彼が小説を書くきっかけを与えた。一方、アイリスは、彼女の良き理解者ジョンの助言を受けて、多くの作品を書き続けることになった。

久しぶりに対面での開催となった第23回大会は、コロナ禍の中で身につけたオンラインの要素も含めた大会となった。青山学院大学に集まった会員が対面で研究発表を披露するその一方で、Zoom を通じて参加する会員と海外からの参加者がそれと一体となるという新たな形の学会発表が実現した。